

『花物語』論 外篇

一九二〇年代の嫁がされた娘たちへの誄。

I

△花物語▽という題名の、各種近代文学全集（個人全集でなく）に収録されている「名作」は、日外アソシエーツ刊『日本文学全集案内』（昭59刊）によれば寺田寅彦の随筆一点のみで、これは調査対象全集一〇四種類中の五種類が収録。そして本稿で取り上げるのは雑誌『少女画報』（東京社発行）に大正五年七月から十三年八月までの間続載され、途中洛陽堂から、完結後交蘭社から、さらに昭和に入ってから実業之日本社、戦後ポプラ社と、版を改めつつ刊行され続けた、吉屋信子の短（掌）篇少女小説集成（全五十二篇）の方である。

この吉屋作品の方の人気の程、又それだけではなくて少女小説としての独自性・画期性の大きさは、作品の本質的価値については△日本の少女たちの遅れ▽に対応したものとしてむしろ否定的な評者でも、逆説的にはあるが

(1) 「花物語」による吉屋信子の登場は、日本の児童文学に新しい領域を開いたといえる。（略）吉屋信子の「花物語」によって、少女小説ははっきりと市民権を確立したといつてよい。

大 森 郁之助

（昭38・3至文堂刊『現代児童文学事典』、この項鳥越信氏）

と認めるほどで、右の文学全集での同題二作の扱いはその△知名度▽とは完全に逆なのだ、吉屋作品が文学の片隅の少女小説、或いは精々児童文学に分類されるもので△一人前の▽文学でなく、しかも、例えば小川未明や坪田譲治と違って、最大公約数的な穩健な解説を常とする場に於てさえも

(2) 多分に感傷的でブルジョアジーへの憧憬が漂よっていることを否めないが、ひどく低俗ということとは当らない。少女小説に清新な分野を開拓したともいえるのである。

（昭30・4宝文館刊『現代児童文学事典』、この項船木枳郎氏）

と、結局は褒めるにしても△低俗▽との世評を前提とされる程、「今の立派な女性の方たちには評判が悪」（本田和子氏「ひらひら少女の図像学」、昭63・10『幻想文学』二十四号）作品・作者としては、当然のことではあろう。

しかし、同様に△低俗な作品だから、当然▽と諦めるわけに行かないのは、『花物語』が、かりにもその△全体像を把えて―評価▽しよ

うとする際にも、その前半部の作業に先行する筈の現実の作品本文のデニタ的に正確な把握を、十分なされていないのではないかと、——早くいえば些か読み飛ばし気味の大まかな読後の印象程度によって、処理される傾向にあるのではないかと、ということである。それほど正確に読むに値いする作品か、という反問に対してはやはり半面の同感しか出来ないで、どうせ判決は死刑なのだから罪名は殺人でも叛乱でもいいじゃないか、というのは失言だろう。

具体例を以て示そう。

前引(2)文で「ブルジョアジーへの憧憬」の存在を否めない、と云うが、これは説明抜きに否めるなら否みたい事、つまりそれが欠点になるのは判り切った事として云われているわけだから、一般論としての他階級への羨望夢想ではなくて(それなら欠点とは決まらない)、昭和戦前期前半の左翼的階級観横行期の情性的用語法に於ける(好ましからざる階級)としての、資本主義社会の対立する二大階級の一方への、(従って)許すべからざる感情、の意であろう(もしも単に漠然と(富める者)への憧憬を悪とするのなら、極めて特徴的な用法歴のある術語を紛らわしく用いない方がよろしかろう)。

それならば当然——そうでなくても語義からして当然だが、そうであれば尚更——、同じく日本近代の富裕階級ではあっても資本主義経済の産物でなく封建的大土地所有制度による地主階級、また貴族階級、或いは軍人・官僚(の中の富裕層)とも区別されていなければ、語の誤用——人騒がせな言い間違いとしなければなるまい。げんに昭和初年代、当時の国家権力の中樞がブルジョアジーか、それとも封建的遺制か、また貴族等の絶対主義的要素をどう位置づけるか、といったことが、左翼経済学者間のいわゆる日本資本主義論争、共産党系革命指導理論に於けるコミンテルンのテエゼの目まぐるしい変転の、中心題目となっていたのである。

では、語の誤用でないとしたら、それへの憧憬が見逃がせぬという指摘は的確であるか。

全五十二篇に登場する(富裕層)で、地主でも貴族でも軍人・官僚でもなく明らかに(ブルジョアジー)資本主義経済社会における生産手段所有者(としての富裕層)と受け取れるのは、かなり緩く考えても、

① 第30話「燃ゆる花」の、鉦山王の夫の富に訣別した(柳原白蓮に想を得たといわれる)夫人の、その(かつての)婚家の

② 32「寒牡丹」の、明治後に「小商人」から成り上がった「富豪」の令嬢——の家

③ 39「合歓の花」の、将官令嬢の麗人が婚いだ「豪商」の家

④ 50「睡蓮」の、予備海軍中將の生命保険会社監査役の、令嬢——の家

それ以外には、ただ漠然と「富豪」「富家」「豪家」「お邸」「長者」「家柄の正しい」家等と呼ばれ或いは具体的に富裕な状況が描かれている、といった、(ブルジョアジー)であるとも判別し難いものの中で、かりに「富豪」はその近代的語感から(ブルジョアジー)を指すのに最も使い易いと見れば(中には明らかに地主家を「富豪」とよんでいる例もあるが、そういうのは除くとして)、

⑤ 28「露草」の、下級生の学資が困難になった時、負担してやろうとする、優しい上級生とその母の、「富豪」の家

くらいを、やや強引ながら追加する意見もあり得ようか。

この五十二話中五話(最大限)という比率が目につく『花物語』全体を特徴づけるものかどうか、一概にはいえないとしても、これと並んで、同じ富裕層でも(貴族)日本近代の実際の用語に即せば(華族)や、王(外国)の姫といった、(身分)的(職業や資産高とは別の)ものも、

- ① 3 「白萩」の、「京の公卿」出身の尼僧——の生家
- ② 19 「紅椿」の、「京からお興入れ遊ば」した——と殊更云うから、公卿華族に連なる?——「奥方」の、実家
- ③ 23 「白芙蓉」の、「若様」を甘やかし詔う家庭教師が仕える、子爵家
- ④ 26 「藤」の、伯爵家の跡取りの天衣無縫な孫娘——の家
- ⑤ 32 「寒牡丹」の、優しく健気な公爵令嬢・子爵令嬢それぞれ——の家
- ⑥ 44 「ヘリオトロープ」の、南国の王宮の姫——の、王家
- の六例を数える。しかも、前述△ブルジョアジイ▽とこちらの△身分▽とが対決する「寒牡丹」に於て富に驕る前者を後者が打ち負かすことが象徴するように、前出△ブルジョアジイ▽登場の計五話中②④でブルジョアジイの娘本人がその心の醜さを衝かれて対して、△身分▽関係六話の中で批判されているのは③の、子爵家に仕える者のみ（若様本人は単に幼い無考え）である。
- ここに、富よりもむしろ貴、只今の力よりも由緒、という好尚の傾向が看取られないだろうか。
- 「白芙蓉」で、家庭教師がやりこめられたことを痛快がって話者と（やりこめた主人公と、ではない）語り合う、という、謂わばどうでもいい（いなくてもいい）人物が「下町の大きな老舗」の末娘だったり、24 「福寿草」での、「代々好んで立派な花を作って伝えるえにし深い」△家の花▽を娘と嫁の晴着に縫い取りするという、△由緒▽の設定、42 「沈丁花」で貧苦と闘う姉妹の家を「旗本の流れ」とすることも、この想定を助けよう。その他、資産状況とは明確に区別して「家柄の正しい」家（11 「紅薔薇白薔薇」・「明治維新まで博多長者の一人なりし」家（50 「睡蓮」）・「由緒正しい家」（51 「心の花」）等の指定も見える。6 「水仙」で「清朝のさる大官の姫」、40 「向日葵」

で「内務省から地方官へ移られたばかりの」県の内務部長の娘が、それぞれ理想的に美化されているのも、富だけが憧憬されているのではない（彼女らはむしろ富んでもいるが）ことを示唆しようか。念の為に云い添えるなら、その△富▽の中ではとくにプロレタリアートの対立階級という「正義の敵」的な(?) △ブルジョアジイ▽が数量的又は質的に重んじられている、ということも又ないわけである。

勿論それは、貧富が余り関心をもたれていないというのとは違う。しかしここでやや視点を変えて、作者は憧憬を以て描いたかも知れないが（読者も憧憬つつ読むかも知れないが）作中世界では既に獲得されていて憧憬の対象ではないところの、主人公の（登場人物の中の誰かの、ではなく）身の上の設定を見ると、△ブルジョアジイ▽△華族▽△地主▽その他「富豪」「富家」「豪家」と称され、或いは称されてしかるべきケエスは六例、やや下って、前項ほど明確ではないが生活ぶりの具体的叙述（例えば別荘がある、病後の保養に温泉へ行く）や親の職業（例えば官吏、医師、牧師、女学校の教師）等から、世間常識的にまあ普通又はそれ以上、少なくとも生計の苦労はなさそうな層が十七例、とくに貧富度に係わる記述のないのが十六例、明らかに貧苦が想像されるかまたは△主張▽されているのが十三例程度、と判断される。もっともこの数値は描かれた状況の見方によって多少変わろうから、念の為に最初の層と最後の層と判断した例を示すと次の通りである。

- ① 11 「紅薔薇白薔薇」で、主人公の二少女の一方が「豪家の愛娘」（もう一人は「家柄の正しい」家の娘）
- ② 25 「三色堇」で、「富める家」の養女
- ③ 26 「藤」で、伯爵家の孫娘
- ④ 28 「露草」で、「富豪」の家の娘
- ⑤ 32 「寒牡丹」で、公爵令嬢

- ⑥ 37 「浜撫子」で、「蜜柑の鈴成る山をいくつ、米俵積む土蔵の幾棟、海岸の別荘、幾千坪の貸地」を持つ「富豪」家の、異腹の娘
- ① 2 「月見草」で、話者の踊りの稽古の相弟子の、母——長崎の蘭医の娘だったが「口にも言えない種々な悲しいことのために、東や西の国々の街から街へさまようて儚ない浮草のような身」に（その娘も「長崎へ昔の人買船を慕うていったきり」）
- ② 4 「野菊」で、「貧しい不遇な彫刻師」の父の死後、叔父の家の「肩身のせまい寄人の身」
- ③ 16 「紅梅白梅」で、「父なき貧しい家」の娘
- ④ 18 「緋桃の花」で、寄宿舎の物置を居室に充てがわれている校費生
- ⑤ 27 「紫陽花」で、「不遇な旅絵師」の父、母、育ててくれた伯父を次々と失い、従姉が歌妓となって絵の修業をさせてくれている
- ⑥ 29 「ダーリア」で、「老いた両親と多い兄妹を持つ、ささやかな暮し」のため「人並のように女学校へ」行けず、見習看護婦に
- ⑦ 31 「釣鐘草」で、父の放蕩により一家離散、女学校へ行けず高小から師範学校（授業料不要）へ
- ⑧ 42 「沈丁花」で、主人公は高小卒で就職、妹だけ、道路工夫の父の事故死の見舞金で女学校へ
- ⑨ 43 「ヒヤシンス」で、父の事業の失敗から女学校中退、就職
- ⑩ 44 「ヘリオトロープ」で、主人公は女奴隷
- ⑪ 47 「桐の花」で、父に「いささかの罪ありて、村を追はれる様に」家屋敷を売り払い上京
- ⑫ 50 「睡蓮」で、没落後「赤貧洗うが如くに近寄りかか」り、「女中が八分五厘」の内弟子に
- ⑬ 52 「曼珠沙華」で、流離の旅芸人の師弟

しかし後者の十三例中、②③は、⑦⑧⑨で断念した女学校へともかく進んでおり、⑩も転校の後無事卒業している。この差や、当時の高等女学校進学率^(註)を考え合わせると、当事者の主観でなくて客観的にも貧困とすべきは若干減るのかも知れない。

又、貧苦の目安を女学校進学に置くとすると、先程貧富不明とした十六例中十三例は女学生で、他も身分ある家に侍女として仕えたり、幼いうちからピアノを習わされたり、昼日中のどかに散索などしているから、貧困層ではない可能性が濃く、恐らく中間層に入ろう（第一層ならその特質の△富▽の顕示があらうから）。とすると、主人公の貧富度の分布の立体モデルは、やや下膨れの卵型（又は最も普通のUFO型）になろうか。

そこでこの作品群のそもその読者層というものを考えると、大正中・後期に月々その掲載誌を購読し得た（勿論借りて読んだ少女もいるだろうが）のは恐らく貧困層ではないから、右の貧富度から見た主人公像はその点では読者像とかなり近かったといえるのではないか。但し、上部と底部とが、中央部（読者の多くが所属した）からの△憧憬▽と△同情▽という△少女▽の二大感情によって、それぞれやや拡大されて（話数を増して）はいそうだが、こと貧富に関する限り、読者をして各自の現実から遊離させるような△夢物語▽ではなかったと云えよう。

また、この作品群では異国への憧れが頻見される。即ち、「海杓かな伊太利の楽壇に名高い曲」が鳴り響く、とか、床の間に「聖母の画像の額」を下げる、とかの類は措いても、

① 1 「鈴蘭」で、「伊太利」の婦人宣教師の遺品のピアノと、その遺児の帰国

② 2 「月見草」で、長崎港の「和蘭陀船（人買船）」と老外人宣教師

- ③ 6 「水仙」で、父と訪れた北京の廃宮と、そこに遊ぶ狂少女
- ④ 7 「名も無き花」で、「S教会のライダー夫人」の別荘や、「巴里にいらした画伯」の贈り物の「フレンチの聖書」
- ⑤ 8 「鬱金桜」で、伊太利から帰国した（父母はまだ滞伊）少女
- ⑥ 9 「忘れな草」で、「伊太利で父を失った孤児」
- ⑦ 11 「紅薔薇白薔薇」で、音楽の師が「かの伊太利のヴァイオリニスト、ミス・サイラー」
- ⑧ 15 「蘭」で、父母を知らず「外国婦人の世話に」なり、伊太利人のピアノ教師につく
- ⑨ 17 「フリージア」で、伊太利帰りの（父母はまだローマに）少女
- ⑩ 18 「緋桃の花」で、貧しく健気な主人公に光明を与えるのは「海をへだてた西の国に学ばれて最高の学位を得てこのほど帰朝された」K女史
- ⑪ 26 「藤」で、伯爵の孫娘「聖羅」の母は、父が巴里遊学中に知った仏国婦人
- ⑫ 30 「燃ゆる花」で、富を捨てて出奔した貴婦人をかくまうミッションスクールの校主「ミス・ワグナー」
- ⑬ 36 「日陰の花」で、洋館の応接室を飾る、外交官の父が海外で求めた「泰西の名画のかずかず」「ルイ十四世時代の卓子に椅子」
- ⑭ 37 「浜撫子」で、親友が家族の後を追って「アイスクリームやバナナやパイナップルや」「珍しい異国の宝石」の島「布哇」へ渡航
- ⑮ 38 「黄薔薇」で、生徒との約束を裏切った女教師が贖罪のため米国内に留学したまま失踪
- ⑯ 44 「ヘリオトロップ」で、「古き仏蘭西の雑誌」に読む、異国の綺譚
- ⑰ 46 「白木蓮」で、級友への片思いに破れ、勉学の鬼となって米国内

留学生の奨学金を獲得

⑱ 49 「玫瑰花」で、父親が「お船に乗って遠い国から持っていらした」異国の品々

⑲ 51 「心の花」で、容姿の醜い少女の嘆きを信仰に導いて救う、長崎の修道院の外人尼僧

24 「福寿草」での、家産を失った名門の男達が亜米利加へ稼ぎに行く、というのは、異国憧憬とは謂い難いと見て（「浜撫子」でのような夢もない）除いたが、それでも全体の三分の一強に現れるのは相当の事であろう。

そこでこの傾向を、前述、△現実的な財力▽への憧れ（それを絶無などとは云っていない）、それに匹敵し或いは上回る強さだが前者とはむしろ逆の空疎さもはらむといえよう、△家柄▽への憧れ、の二つと合わせて眺めるなら、なんのことはない、そのまま成人用通俗小説の主要構成要素であり、さらにいえば極く月並なスノビズムに帰してしまうものではないか。

それ以上に意味づけるのも、或いは軽蔑するのも、共に当を欠かう。

II

『花物語』の全体像の改竄に近いまでの何ごとかの誇張という傾向は、この作品群が少女読者に示した人生、なした方向づけという、些か厳肅に論ぜられるべき事柄に関しても常態化しているかに見える。例えは、

(1) 吉屋信子の少女小説は、殆どの作品が同性愛を主題にしている。

またその文体は、独特のひびきをもっている。(略)このような主題、文体は、男の子の読者には殆ど受け入れられず、圧倒的に

女の子の読者にアピールした。ということとは、日本の少女たちが、吉屋信子の少女小説を受け入れるにふさわしい環境にあったことを意味している。／つまり、日本の少女たちは、依然として封建的な男女観、恋愛観の中にとじこめられ、そのわくを突き破ることはしないで、もっぱら気もちの上だけでの代替行為によって、はげ口を見出していたのである。同性愛や宝塚少女歌劇に象徴される女だけの世界における精神の発散行為は、その意味で、封建的な体制を維持しようとする権力者にとって絶対の安全弁であったが、吉屋信子の少女小説は、そうした権力者のイデオロギーと、その下にとじこめられた少女たちの精神的状況と、両者の代弁を共につとめたことになるといえるだろう。

〔前節引用(1)の続き。至文堂版『現代児童文学事典』、鳥越信氏〕

(3)初期の小説『屋根裏の二処女』が端的に示しているように、男が支配し女が服従する関係を極端に嫌悪した信子は、女同士の対等の愛情に人間関係の理想をみていた。この考えは少女同士の「同性愛」という直接的な形をとって時折少女小説にも導入されたが、(略)当時の大方の少女小説の主人公がしばしば周囲の男性の補佐役に徹することに自らの存在意義を見いだしていたのに対し、信子の描く少女はあくまでも自分自身の内面性にこだわり、自分自身の力でその困難を乗り越えようとしたのである。

〔昭63・4東京書籍刊『児童文学事典』、この項横川寿美子氏〕

まず(1)についてだが、前段は、大雨が地面に吸収されてしまったのは土地が水分を吸収しやすい状態にあったことを意味する、というようなもので、殊更云う必要もなさそうに思えるが、別段異論もない。しかし後段は、要するに封建的体制下の少女達が思想的制約から体

制の打破に向かわず同性愛等に逃避し、結果的に封建的体制の持続を助けた、という趣意なのだろうか。打破しようとするれば打破出来た筈、という認識なのだろうか。それとも、打破に長年月(殆ど半永久的!?)を要することは判っているし又打破一本槍で姑息な逃避など許されなから実際の苦しみはそっくりそのまままで続くだろうが、そんなことは介意しない、打破の姿勢に意味があるのだ、という立場か。前者なら敗戦迄の婦人運動・社会運動への謂われなき誹謗だろうし、後者なら政治や社会運動を(美学)と混同するものだろう。

そして、そのいずれであるにせよ、又その認識の正誤、方策の適否は別にしても、現実社会に対する斯くあらしむべしを文学の世界(少女小説は文学ではない、とするなら話はべつ)の斯く描くべしに無段階的であてはめる、という、余りにも初歩的な錯誤を犯している(——ものとしたか、この記述からは受け取れない)。

しかし、本稿で問題としたのはもっと末梢的な、この作品群がはたして日本の少女達の対・男性(社会)事情の「気もちの上だけの代替行為」「精神の発散行為」たりえたらうか、ということである。

(1)と対照的に同一事象を好意的・肯定的にとらえた(3)に合わせて云えば、主人公の中の何人か(全員では断じてない、後述)が「自分自身の……力でその困難を乗り越えよう」と希った、或いは努めた、と迄は認めるとしても、それは読者をして、(自分も……乗り越えよう)という想いを起こさせるような成果を(功利的に)、又は形象を(美的に)、達成しているか、どうか。

作者吉屋信子の、制作意図と迄は云わず、自己の本心として、(3)に云うように(男)が支配し女が服従する関係(への嫌悪と、(女)同士の対等の愛情)の理想視があったらうことは、私小説的乃至演説小説的色彩の濃い長篇小説中の次のような述懐(登場人物の)からもうか(群)がえる。

堂々とした体軀で婦人達を突きとばして昂然と（電車に）乗り込む紳士たちを見ると、いったい彼の母は婦人であるのを知っているかしら——彼の妻は婦人ではないのかしら——と不思議だった。／＼けれども章子をして一番烈しい失望と憤りの、どん底へ陥れるのは青年達の態度であった。（略）若い処女のたれしものが（略）彼等の群から自分達の良人が運命の手によって与えられる日がいつかは来るのだと思うだけでも、どんなに人生というものをたよりなく寂しく思うであろう——章子の眼には涙が湧いた。——（大9・1洛陽堂刊『屋根裏の二処女』、第三篇の三）

とか、
考へれば不思議、何んだつて、あんなに何から何までちがふ異性へ何故思ひを寄せて好ましく濃やかな情が運べるのかしら？へ、んねえ、同じ姿同じ身体同じ性のひとにこそ強い同感を呼び愛情を感じ濃やかに共鳴る想ひを交せる筈なのに——（略）魂の上では手触りの悪い粗野な結びつきであり、男女は身体の結び合ひで、ゆけるのかも知れぬ。（略）しかし同性の場合ではそのごまかしはとても出来ぬ。裸身の魂と魂との接触でのみ結び合ふより術がないのだから、相互に通はせ合ふ心の息吹きはより濃やかに濃やかに為し能ふだけの密度に煮つまつた気持ちで、ひとひらの嘘も許し置く隙間のない二つの生きた魂のつらなりであり、
（略）（或る愚しき者の話^{註3}、大14・1〜8『黒薔薇』）

など——。
しかし、そうした本心の存在（は疑われないとしても）と、作品形象への実現とは、別の事である。この作者についての現在唯一の単行評伝の著者吉武輝子氏は

『花物語』が現在に至るまで他の少女小説の追隨を許さぬ稀有な点は、女の幸せは結婚という考えが不動であった時代であるにも

かわらず、結婚志向が皆無であるということ、むしろ、結婚は女の自我を押しつぶすものとして忌避されている点にあるといっている。
（『女人 吉屋信子』）

信子は初期の頃には、おずおずとした思慕というかたちで、女同士の愛のすがたを描いていた。しかし、後期の作品においては、異性愛にいたる、そのプロセスとしての同性愛ではなく、異性愛と同格の、いやむしろ、上位に属する愛のかたちとして、明確に同性愛を位置づけるようになる。
（同 右）

とするが、例えば後の引用部分に続けて例証（「初期」の？「後期」の？）として挙げるところの38「黄薔薇」の女教師は、愛し合う女生徒と「二人相連れてアメリカのカレッジに学ぶというその将来に誓いを立て」ながら、卒業も間近くなってそれと知らぬ生徒の親から躰養子を否む娘の説得を頼まれると、

親の勝手に定めた結婚に反対し抗議する理論はいくらでもある、けれども今この両親達の前でその正しい理論がなんの効果もあるうとも思えぬ。まして（略）二人の愛情を露骨に表白しそれを楯に取るのには、あまりに薄弱な理由だ、自分達が世常の結婚の型をとって生活できぬ同じ性の人間の悲しさには——結婚をもって唯一の女性の最後の冠とのみ思い詰めている親——社会の人心はこれを罵しり嘲けて許すはずは無い——。

と独り思い決めてしまう。生徒の結婚式は卒業早々四月上旬に挙げられ、「祝はぐ宴のそれなるに、榮ある式のそれなるに麗人泪を含みてうつむきて終」る。女教師の方は「卒業期に早くも」退職、五月には一人米国に旅立って、「二年目頃の秋より便りが絶え」る。

女教師が（多分生徒の方も）自己の価値観としては同性の愛を上位に置いていたのであることは察せられるが、それは現実には男性優位社会に対して何の抵抗も生まれない。抵抗してもどうせ敗れた

管、ということとは問題が別である。少なくとも生徒の側からいえば、それならいっそ途中で同性の愛などに目を開かせられず、その世界に生きることも可能なような夢を抱かされなかった方が、△気もちの上▽精神▽だけの事としても無知の安らかさに終り得た、とも考えられる。かりに当事者の側については智慧の実を食べたことの不幸は議論の余地があるとして、体制の方からいっても無知ゆえの何とない不満感にとどまっていた方がより安全、ということとはなかったか？ それとも、積極的絶望を経た方が安心か、軽々には云えない。

逆説的にはあるがこの反対に、同性の繋がり全うしたことになろう型としては、愛し合う少女同志又はやや年上の若い女性との間の、心中、後追い心中、及び企てざる（しかし不本意ではなさそうな）心中が、それぞれ一件ずつある。この中、最も浪漫的な48「梨の花」で亡き友（死因は特記なし）の俳を慕って曾遊の魔塔に上った少女が友の幻に引かれて墜死するのは、別段何かの社会的迫害があったもののように読めないし、52「曼珠沙華」で芸を売るのを拒み行くあてを失った旅芸人の師弟が仮寝した野の花の毒氣にあたり眠る如くに死ぬのも、とくに女同志ゆえの流離というわけではない。しかし、30「燃ゆる花」での、「銅でも石炭でも、掘れば飛び出して来る宝の山の持主の令夫人」の座を愛のない結婚のゆえに（らしい）捨てて母校の寄宿舎に身を隠した麗人が、追手に放火されても逃げ出そうとせず、彼女を慕う少女（本話の主人公）と共に焼死するのは、体制側からいえば叛逆に対する処罰であり、女の側からいえば不屈の自我を貫いてそれに殉じたわけだろう。

また、もう少し寛やかにとりなすなら、『花物語』には右の△二人で死ぬ▽型の他に一人の少女（又は、若い女性）の死を含む話が九話あって、前引吉武氏は「信子が少女の死を、魂の不可侵性の象徴とし

て捉えているからだろう」（『女人 吉屋信子』）とするけれども、何かに△侵される▽ことを拒んでの、又は、何かを△守って▽の死といえるのは、うち四話（27「紫陽花」、37「浜撫子」、42「沈丁花」、44「ヘリオトロープ」）に止まる。つまり過半はとくに意義も必然性もない便宜的な設定の観があるのに対して、△二人の死▽は皆それなりに吉武説に沿っているとはいえよう。

ところで当面の問題は、その△二人の死▽の最後のケエスの、十分美しいには違いない、「匂い高くも葩を散らして」「紅蓮の焰の中に咲く真白き花」の「奇しく美しい伝え話」が、我が身によそえ身につまされて読んだ少女に対してはどういう行路を訓えたらうか、ということである。

圧倒的多数はこれを読んだ読まないに関わりなく、この夫人とは違って常法通り嫁ぎそのままに収まった（既婚者ならそのまま諦めた）ろうことは疑いない。しかし、この話の直接のモデルかつ執筆動機という（吉武氏前掲書）大正十年秋の閨秀歌人柳原白蓮と炭鋺王伊藤伝右衛門との離婚事件自体の方は、同性の間にさえ

それよりも前に、わたしはかなり重く信用してよい人から、こういうふうにも聞いていた。

（略）あの人の歌は、どこまでが芸術で、どこまでが生活なのか——あの生活が嫌なのだとはどうしても思われない。

（長谷川時雨『近代美人伝』。初版昭11・2サイレン社刊、引用は岩波文庫版による）

といった疑義もあったにせよ、実現した結果としては年下の愛人との成婚という△実▽を得ている。その現実比して吉屋作品の方は、少なくとも功利的には（大多数の少女は美より功利を取るだろう）より絶望的であって、実生活的△対社会的△効果▽としては白蓮事件の模倣を制止し、而して、嫁がせられてゆく少女達の内面を無知の薄曇り

から絶望断念の闇黒に変えていよう。

もつとも、『花物語』全体としては、「黄薔薇」や「燃ゆる花」のように結婚問題（及びその後）にまで（適齢期にまで）およぶのは極く少数である。もう一例は37「浜撫子」で、養母であるため(?)結婚を急がされ、女学校卒業前の秋に嫁がされることになって海に身を投げける。ここでも又、少女達の現実の閉塞状況の△はけ口▽とよぶことに對して納得出来ない思いが募るが、これらの△少数派▽的性格を考慮して、大多数を占めるところの結婚問題未現出の年齢・境遇の主人公達に目を転じよう。

『花物語』各篇の人間関係を通観して愕くのは、親元を離れた寄宿生・保養先・別荘（他家の）滞在中・侍女奉公・住み込み看護婦・郷里を離れて修学修業、赴任、等の設定の主人公が（主人公だけに限っても）二十五件、全話数の半ばに達することである。

この中、十三件を数える寄宿生という設定について一言すれば、『花物語』の定型となった△女学校寄宿舎▽を舞台とする話云々という解説もある（荒瀬史氏「大正—昭和メルヘン&ファンタジー必携」、『幻想文学』二十四号）が、実際には主人公は寄宿生でも△相手▽がそうでなくて寄宿舎が舞台とはならなかったり、寄宿生活以外の出来事や退寮後が主題だったりするのが約半数、更に寄宿舎が舞台となつてはいても完型△同室のお姉様▽物はというと、知り合つてのちに相手も入学・入寮して来て△同室のお姉様▽になる「燃ゆる花」も含めて、やつと三件を数えるにとどまる。そのように、いわば主題からの必然性は薄いのには寄宿生という設定が頻出することは、現実の寄宿生というものが珍しくなかった（むろん、数そのものとしては通学生が絶対多数でも）ことを察せしめる。それだけ、相当に広い範囲の地域の住民にとって女学校は家郷を離れて△遊学▽する先であった——或いは、そういうイメージが存した——わけだろうから、そこに

は当然相当の憧れもあって、当時の少女読者にとって△寄宿舎—生活▽はそうした事情の象徴として、何ごとか感ぜしめるもののある設定だったろうか、と想像させる。

しかしそれにしても、全主人公の半数が親元を離れているというのは、例えば読者側の実態とは大きく隔たった、いわば異常な比率なのではないか。つまり、△親▽という、庇護者でもあるが体制の最も手近な末端部分を、物理的に遠のけようという意図を感じるのだが、その△勘ぐり▽を裏づけるかのように、心理的にも親はかなり影が薄い。齒に衣着せずにいえば、庇護者として（裏返せば体制の末端として）ということにもなるが、あまり有能とも良心的とも謂い難いのである。

とくに父親の場合、それが目立つ。

積極的に価値ある存在として機能しているのは5「山茶花」で娘の頼みで穢多村に往診に行つてやり病人を救う医師くらいである。その他は前述「浜撫子」のように養母に気をかねて(?)早い結婚を強いたり、自分の生活の荒みから女学校を中退させて舞踊劇の一座に売り飛ばしたり（20「雛芥子」）、放蕩して一家離散を招いたり（31「釣鐘草」）、母を失った弟妹の世話のために廃学・帰郷させたり（13「コスモス」）等々（他に時勢や事業の失敗で窮迫し娘に苦勞させる、というものもあり、これは仕方がないとしても）、△この親さえ居なければ▽型が目立つ。むろん実数としては僅かで、大多数の父親は事も無く責務は果たしているから特に叙述に及ばないわけではあるが、それらは叙述されない故に、右の特記された少数者はやはり目を引くのである。

右の中で「コスモス」の場合について付言すれば、長女の帰郷の決心は母に死の床で頼まれたからであり、父はその決心を「今はそうでもあとで悔いはせぬか」といさめてはいるが、口で言うだけでは何も

しないと同じであろう。結局は女中も雇わず（人手不足の現代ではない）、後妻を入れる甲斐性もなく（継子苛めをさせないのも父親Ⅱ夫の甲斐性の内だろう）、娘の健気さによりかかってしまうのであって、前掲、積極的に有害な父親に次いで、自分から害は起こさないが防ぐ気力もない、△頼りにならない▽消極的に有害な父親、と云っておこう。それよりはまじだが、25「三色堇」の父親も、別れた娘と互いに知らずに女学校で師弟として出会い、何故ともなく慕われながら、それと知ると忽然と姿を消す。良い意味で存在意義を発揮すべき場合に無力化するのである。

では、母親はどうか。前の「コスモス」の例は夫や幼い弟妹に負担を強いることになる女中・後添い等は発想せず、長女の犠牲を同性として求める点、男尊女卑を自分も耐えた(?)のだからと他にも当然視して、愚かさ弱さの故に意識せずして有害となる、前述、積極的有害性をはらんだ父親像と対をなすものだろう。

そうした消極性（父親の積極性よりはましな）のゆえか、亡父追慕がゼロなのに亡母追慕は四話（1「鈴蘭」、2「月見草」、17「フリージャ」、36「日陰の花」）に見え、反対に病む娘への母の慈愛と心労（7「名も無き花」、12「山梔の花」）、別れた娘への心遣い（4「野

1 鈴 蘭	父・娘	母・娘	女教師・生徒	上級生・下級生	姉・妹	上記以外の 年上・年下 関係	同学年・同 年齢層間	姉・弟
2 月 見 草		↑ ↑					⊕ ⊕	
3 萩 草								
4 野 菊								
5 山 茶 花								
6 水 仙 花								
7 名も無き花		↕						

菊」も、父親よりは豊かといえよう。娘にせがまれば親しい下級生に学費の援助もしようとする（28「露草」）。

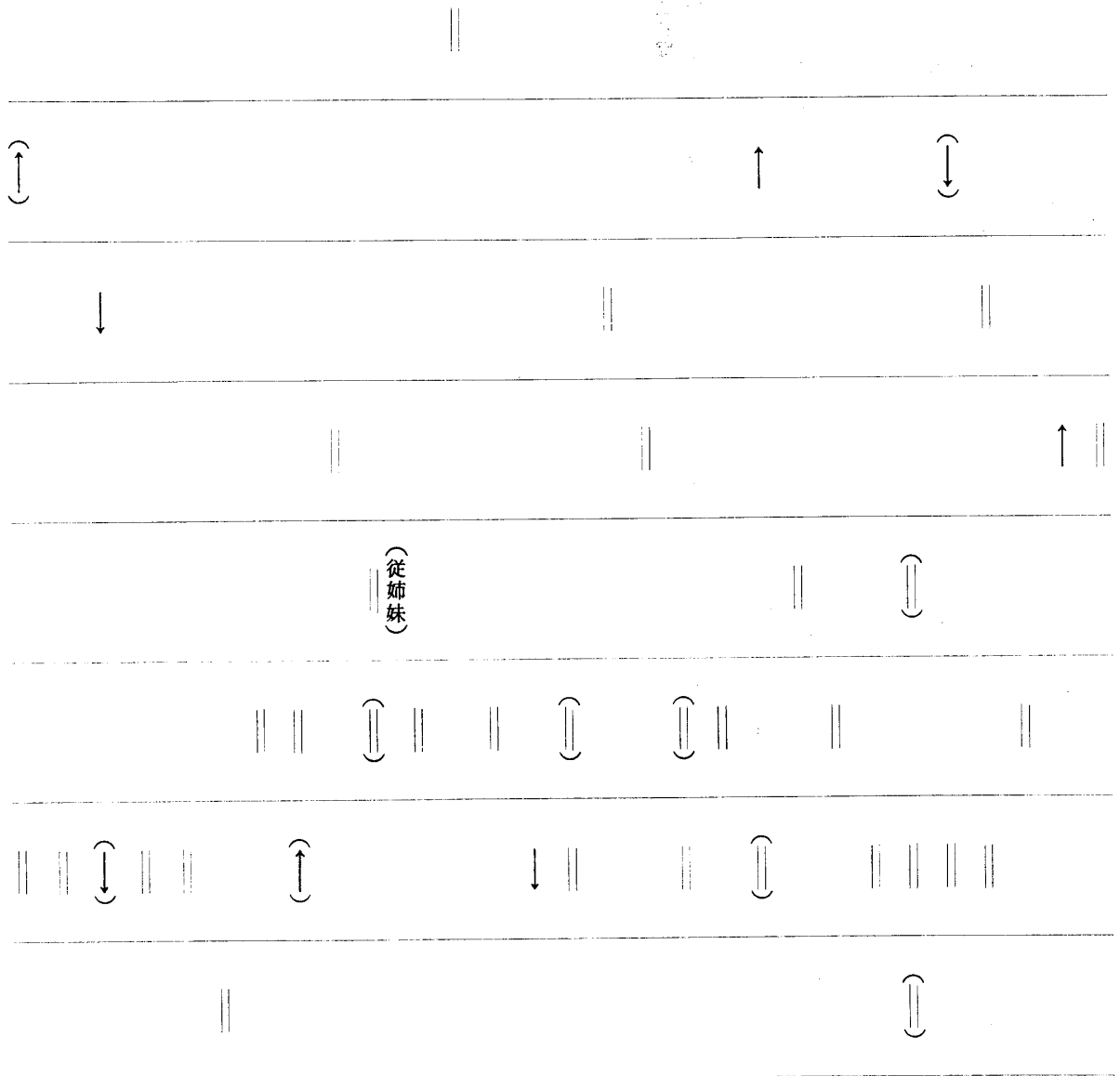
しかし、そこ迄なのである。美しい妹娘の死を嘆いて、「死んでも好いという子は生きている、ままになるなら代らせてやりたかった」と姉娘に言う母の「女の胸のせま」さ（51「心の花」）も描かれているが、父親に比べればここでも害悪の積極性がもう一步なのと同様に、前の「露草」の母親の好意にしても、相手は△お姉様▽の重荷となるのを辛がって帰郷してしまつて実らない。現実には直接有効に作用しない傾向は、益・害共通といえよう。

このように、少数の実害型父親を除いて△親▽が余り重大な存在たらしめられて（娘から）いないことは、微弱ながら△体制▽への不満不信、消極的ながら背を向けた姿勢、と取り做してよからうか。

III

『花物語』の主人公達の大多数にとって心理的に最も重大な人物は、△同性愛小説▽というイメージ通り、年齢の近い同性であつて、各篇の中心となる人間関係の種類別分布は次表のようになる。

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
日	桜	ア	秋	寒	釣	燃	ダ	露	紫	藤	三	福	白	桔	白	雛	紅	緋	フリ	紅	蘭	白	コ	山	紅	あ	忘	鬱
陰		カ	海	牡	鐘	ゆ	ー		陽		色	寿	芙		百	芥		桃	の	梅			ス	梔	紅	や	れ	金
の		シ		牡	る		リ											の	白			ス	の	白	め	な		桜
花	草	ア	棠	丹	草	花	ア	草	花		堇	草	蓉	梗	合	子	椿	花	ア	梅		菊	ス	花	薇	草		



(從姉妹)

凡例

通常の、相互的關係。
 ↑ ↓ 所謂片思い等、どちらか一方からのみの（又は、一方の感情が格段に強い）關係（同齡層間では上方を主人公又はよ
 り主たる人物とする）。

() 一篇内に複数の有力な感情關係がある場合、その従たる方（主従を定め難い場合は無記入）。

52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
曼珠沙華	心の花	睡蓮	玫瑰花	梨花	桐の花	白木蓮	スイートピー	ヘリオトロープ	ヒヤシンス	沈丁花	竜胆の花	向日葵	合歓の花	黄薔薇	浜撫子

さて、各種記号の区別はやや煩雑かと思うから、各篇についてとにかく何らかの記載のある欄、という程度に通観しても、一見、次の二点が目につこう。

(イ) 同学年又は同齡層間（一歳違い程度で上下感を持たれていない場合も含む）が全体の過半に見られ、最も頻繁。

(ロ) 血縁以外の年齢差のある關係では同じ学校の上級生下級生關係は僅か六件で、それ以外（学校外）の關係の半数以下。

先に(ロ)について云うと、全体の六割弱の三十篇で主人公又は副主人公

が女学生なのに、いわゆる△上級生のお姉様▽物がその二割に過ぎないのは、或いは先験的イメージを裏切るものかと思うが、問題なのはそれとも関連する(イ)の傾向である。概ね自身は無力（どんな意味でも）な少女の△相手▽も又、ほぼ同年齢の少女であれば、

A、主人公（等）のかかえる△問題▽は遂に打開克服され難いのではないか。

或いはそこから溯って、

B、そもそも打開克服が求められる（又は、あり得る）ような問題

は含まない設定にとどまるのではないか。といったことが予想されないだろうか。

これも実例によって検証しよう。

学校生徒にとって最も重大（少なくとも容易に想像に浮かぶ範囲では）な厄難であろう、△家庭の事情で▽学校を中退してゆく（主人公又は相手が）話が五話あるが、その中で救済の途が講じられるのは（同室の話者がまだ七歳で事情さえよく判らない8「鬱金桜」は別としても）前述「露草」の、同室の上級生が自分の母親に頼んでという形のみである。これは当然ではあるので、一般的には、20「雛芥子」で学校から姿を消した下級生の行方を求める少女が、

こうして、あのひとを求め尋ねて、自分は救うつもりだけれどもはたして私にそれだけの力が備えられてあるだろうか、また現在の境遇がそれを許すだろうか？

と自問自答して「ひそかに恥じ」、以後はただ「忘れ得ぬ人として胸に秘むるのみで、再びその（ゆくえ）を尋ね求めようとはしなかった」というのが、遅速の差はあれ、有り得る唯一の決着であろう。もちろん、13「コスモス」のように、帰郷してしまっただけから手紙で、母の重態、死、廃学の決心と嘆きを訴え慰め励ましを受けるだけ、というのもあって、現実からいえばこの方が更に一般的であろうか。

単純な貧窮等による退学と違って、親の方針で郷里に退去させられる（23「白芙蓉」）とか、一家そろっての退転（40「向日葵」）逃亡（49「玫瑰花」）とかをどうにも出来ないのは無力な少女でなくても同じ事だろうが（前述、死に終るケネスはいうまでもない）、学業の継続に限らず、△救済▽△克服▽と云えるような結果はすべて、少女間（殊に、同層の）では難しく、他の力を引き入れるか、又は片方が多少なりと年上であること△脱△少女▽性によってである。5「山茶花」では父親の医師が「医院の名にもかかはるほどの」無理な娘の

頼みを聞き入れてくれたからだし、21「白百合」で寮則違反を救ってくれるのも偽証がそのまま通る教師ゆえ（同じように偽証で友達を救う45「スイートピー」も、教師に信頼の厚い少女だ）、24「福寿草」でバザアに出した△家の花▽を付け値で買い上げ面目を保たせてくれるのも富める実家に戻った嫂、26「藤」で曲馬団を逃げ出した幼い少女を馬に乗せて連れ去ることができたのは、別荘に來ている伯爵令嬢なればこそである。27「紫陽花」で歌妓となつて従妹の画業修業を扶助できるのも二歳年上だからだし（但し過労から△？△死）、29「ダリア」で女学校進学を諦め看護婦修業中の主人公を娘の学友に引き取るうとするのは親ぐるみの意向、42「沈丁花」で妹だけはせめてと女学校へ進ませるのも三つ上の姉（但し無理が重なつて死）、51「心の花」で家族に疎まれる醜女を修道院に救い取るのも「母となり、姉となり、かつ師と」なり得る年齢差のある先輩修道尼である。

同層間で、32「寒牡丹」の公爵令嬢が歌留多会で拜金宗の婦人の卑劣を圧え家運の傾いた子爵令嬢に勝たせるのは、相手も一目置く親の地位が与つていよう。

そうした他の力を全く借りない場合は、44「ヘリオトロープ」の女奴隷が自己の体力気力一つで、噴火の降灰の下、憧れの王姫を救出するのが唯一の例外だが、彼女も命がけで救出した姫を婚約者の隣国の王子に購ひ取られて落胆、斃死する。31「釣鐘草」でも、女子師範生の主人公が弟に木馬を買ってやろうとして盗みの疑いをかけられてまで稼いだ金は弟の急死に間に合わなかった。残酷な云い方をすれば、間に合う時間内に稼ぎ出すことはまだ彼女の力に余つたのである。

2「月見草」では行方知れずの友について「長崎へ昔の人買船（母にゆかりの？）を慕うていったきり」と嘆くだけだし、16「紅梅白梅」の少女も貧しさから泣く泣く養女に出される妹を引き止めるすべとて無く、35「桜草」では入試問題のプリントの不鮮明個所を見せて

くれたため不正行為と疑われた友を、弁解一つしてやれない。39「合歓の花」で級友の想いを今は若妻となっている想われびとに伝えてやれたのは級友の死後であって、想われびとの涙は墓前に落ちるのみである。43「ヒヤシンス」では、職を失うのを恐れて職場の先輩の「お姉様」を裏切ることにさえなる。

では、なし得たこと、甲斐あつたことは皆無なのかといえは、3「白萩」で草庵の門前でふと吟じた口癖の詩句が尼僧の迷いを消す、とか、7「名も無き花」で不治の病の少女に贈った聖書が信仰のきっかけとなる、とかは、或いは偶然であり或いは根本的には本人の力といえない。17「フリージア」で、母の死の報から健気に立ち直った少女を友達が讃え励ますのも、19「紅椿」で侍女が誤って流れに落ちた奥方の手球を落魄した長者の遺児が拾ってくれるのも、33「秋海棠」で文芸会の出し物がち合ったのを相手のクラスに譲ってやるのも、すべて、云ってみれば△それだけのこと▽である。日常生活の中の、事々しくない、それだけに清々しい友情、思いやり、とは謂えて、雑念に乱されがちな煩瑣な現実への一服の清涼剤として評価するのはいいが、それ以上に、問題の解決とか状況の打開とか云う程の△問題▽や△状況▽に、対応しているわけではない。

そうした△微力▽さと対照的なのは同級又は同学年同齡層間の片思い二例中の一例(46「白木蓮」と、心変わり・裏切り二例中の一例(50「睡蓮」)であって、その悲嘆が主人公を発奮させて米國留学のスカラシップを得させたり、逆に失意帰郷させたりと、事態を大きく展開させる力を示しているのは皮肉だが、似たような例として女教師の教え子への愛着がその生徒を想う別の生徒を絶望させ廃学・帰郷、のち遂に発狂に追い込む(34「アカシア」とか、片思いの相手の級友が別の友を想っていると知って絶望し家族の後を追ってハワイへ去る(37「浜撫子」とか)いふのもあり、べつだん△女同志▽の有害さと

いう自嘲・自虐ではなくて、△女同志▽という関係の、彼女らにとっての重味を描いているわけだろう。

話を戻すと、同齡者間では大事に際しては△無力を嘆き合うのみ▽であって当然(そのために大人の存在意義がある)、そうならなかったら話が旨すぎる。不審なのは、なぜそういう無力さの判り切っている組み合わせを多く描き、有効に助け合えるような組み合わせ——例えば少女小説としては些かも不自然でない△お姉様▽関係(出来れば上級生などよりもっと年上の方がいいが)を制したのだろう、ということである(現実には、友達は同齡の方が多から、というのは理由にならない)。

この不審を募らすのは、前にも引いた、『花物語』を書き続けている最中の作品『屋根裏の二処女』で、対・男性と限らず凡そ対・世間的に△違和▽の女主人公の前に、

今晚という今——私はわかりました、私はどうしても貴女といっしよにゆく者でした——(略)

ふたりは強い女になりました、出てゆけというならこの屋根裏(二人が住んでいた「YW(C?)A」の寄宿舎)を今日にも明日にも出ましよう、(略)世の掟にはずれようと人の道に逆こうと、それがなんです、ふたりの生き方はふたりにのみ与えられた人生の行路です、(略)ふたりのみゆく路をふたりで探しまし

よう、——これから——(第五篇の九)

と呼びかける、恐ろしい程に強い自我を冷静に保持した、美貌の(らしい)友を登場させていることである。私小説的に読もうとすればこの△同伴▽志願者は作者が同性との結び付きを模索していた最初期、大正七年暮に結ばれ、少なくとも約半年間熱烈な感情を分かち合った実在女性(作者より二三歳年長の)をモデルとし、その出会いを発想源としていると見られる(吉武氏前掲書)から、作者本人の生活実践

に即せば、決して『花物語』の少女達のように、共に無力な二人手を取り合つて泣くばかり、とはならなかつた筈なのだ。

もっとも、作者の私生活密着の勘ぐりの読み方に徹すれば、このモデルの女性とはお互いに求めるものぐいちがいから九年初秋には完全に絶縁したらしく、その萌しは八年初夏には表われていたようだから（同前）、八年晩夏の作という（同）『屋根裏……』の設定には懷疑の影も射していた可能性もある——ことになろうか。

しかし、それはもう作品の読みと作者の私生活についての知識との、先後主従の顛倒だろう。些か独断乃至独善的な観さえあるこの作品の昂揚感漲る本文自体に、そうは言いつつも懷疑或いは反語の気配が感じとられるというのでないかぎり、やがて十二年一月（『花物語』完結の一年半前）には以後五十年に及ぶ終生の伴侶となる門馬千代氏と出会っている——つまり決して断念などはしていなかつた——作者の本心を疑うのは、紙上の心理遊戯に過ぎまい。

かりに、百歩ならぬ千歩譲つて、時間的に最初の女性との△危機▽に近接してはいる『屋根裏……』についてはそうした疑いを保留するとしても、その前後のより長い△信念安定期▽又は少なくとも△願望追求—充足期▽とも重なる『花物語』全体にまで、疑いを拡げるのはどう考えても不当だろう。

では、やはり『屋根裏……』及び「或る愚しき者の話」（こちらは『花物語』完結の約半年後）の感想や主張・志向は『花物語』の作者の実生活にも裏付けられた本心だつたとして、この二作乃至本心と、『花物語』の消極的△諦観志向的な人物設定（当然、展開もそうなるが）——基本姿勢、根本方針——との差違は、なにゆえ生じたのか。

ここで身の潔白のために一言しておくくと、本稿は『花物語』を高く評価しその正当な地位請求を試みる、といったわけのものではない。内容云々以前の段階で、吉武氏さえも「四十五歳になつて」再読した

時には「鼻白むものがあつた」と云う「時代がかつた美文調」には概ね僻易するし、室生犀星がかりにも

これは彩色ある小品文ではなく、永い年代を経ながらも感動は重く、今日、私に吉屋信子が詩人であつて小説家の仲間にはいつてゐることが、間違ひではなかつたかと、思はせたくらゐであつた。それほど詩人の感じ方、見方、動き方があつた。

（『黄金の針（女流作家評伝）——第二回・吉屋信子』、昭35・2『婦人公論』）

と絶賛した「ヘリオトロープ」にも、さ程は感心しない。再読に耐えろとしたのは「梨花の花」一篇のみである。偶然ながら時期的には『花物語』後半とほぼ重なる、いわゆる内容的価値論争の菊池寛風（以上）な諸児童文学事典の論理には同調しない立場だから、作中人生観どうこう以前にこの作品の評価は既に決めてあるので、如上の△なぜ？▽は『花物語』乃至吉屋信子を惜しんで発しているのではない。同一作家の同一時期に於ける、かほどの△使い分け▽を、純論理的に訝かしく思うのである。

そこで思い合わされるのは、例えば「露草」での下級生の、援助の辞退し方である。

親代りの遠国の伯父から、商売の手違いで遙々遊学させておけなくなつたので「この手紙を見た上（は？）決心して速やかに帰国」せよと云つて来る。「第一に相談」を受けた寮の同室の上級生は「その明るる日」帰省して母親に学資負担を約させるのだが、いったんは喜んで下級生は「いづともなく」反抗的になつて「間もなく」「毎日」帰郷の仕度をつけ、とど、上級生が授業に出ている間に退寮してしまふ。置手紙によれば、自分のせいで重荷を負わせるのが辛いから「一日も早く私のような者は仕方がないと離れて行って下さるよう」に仕向けたのだが、それでも見放してくれないから「もう私はおそばを離

れて帰国するよりほかいたし方が」なくなった、とする。

しかし考えてみればこれは理が通らないので、そんなに愚図愚図と、見放されるのを待って寮に（学校に）留まっている時間的余裕を与えられていたのだろうか。又、上級生が見放してくれば、帰郷しないで済む途もあったというのか。上級生の厚意にすぎない以外学資の出所がないなら（有るのなら、あれこれ手数をかけずともそちらに切り換えれば済む）、すぎるまいと決めたら速やかに帰郷してしまえば（見放されず、心残りでも、帰郷は出来る）それで終るではないか。つまり下級生の愛想づかしは、作中人物にとって何かを回避又は達成するための止むない手段だったのでなく、読者に向けて愁嘆場をより情緒纏綿たらしめるための技巧としか解せない（下級生が低脳か自虐趣味、又は悲劇のヒロインを気取りたかったと見れば別だが）。

そしてこうした小細工の傾向、愁嘆場好みは、少女小説という△不健全な▽世界の不文律、というわけでもない。例えば、昭和に入ってからではあるが（こんな所にまで時代の必然性とは謂えまい）川端康成の『学校の花』（昭8・9・12）や『翼にのせて』（昭11・6）では、似たような事情で復学或いは進学を助けようとする友達の厚意は断っても下手な策は弄せず、断られた方も理性的に相手の気持を理解するから、断った後も友達同志の仲は変わらない。それに比べて『花物語』の、事態の打開より愁嘆の深刻を第一としたようなプロット作りは、前述、基本的な登場人物の組み合わせの或る△方向性▽と、大まかには軌を一にし、その偶然ではなかったことを推察させようか。

もっとも、愁嘆場の演出のあくどさと、登場人物の運命への冷淡（救済放棄という）とは、方向は共通でも次元が異なるろう。前者の局部的嗜好にとどまらず後者の基本的構想にまで及んだ（再三云うが作者としての本心にも生活者としての実践にも反して）理由は、と考えても、板垣直子氏の口吻を借りれば△吉屋信子学者でない▽本稿筆者

には、或いは「黄薔薇」で同性愛への世の指弾を恐れた女教師に通ずるものがあつたのだろうか、という程度の臆測しかなし得ない。「黄薔薇」の登場人物が相手の女生徒よりも、自分に浴びせられよう非難を恐れて相手の前途を閉ざしてしまったように、「小市民的な臆病さをもつ」（吉武氏）作者は我が身を庇って、結果的に不特定多数の少女読者の行く手の暗澹感を濃からしめることの方を選んだのだろうか。

かりにそれに近い事情だつたとしても、別段、作者その人を糾弾しようなどという気はない。「ヒヤシンス」の末尾に、この話を作者宛に書き送った少女（恐らく架空の設定だろうが）に向かつて、作者の、
——さん、お二人ともいらしてください、私の小さい書齋の扉は貴女方のためにいつでも開かれております。お二人の泪の末に私の泪をも加えて御一緒に泣かせて下さいませ。

との言葉がある。たしかに、不幸な事態そのものは些かも変わらなくても、泣く△場▽があるのは無いよりましではあり、それを与えたことを以て作者は自足したのかも知れない。しかし、そうした（程度の）作品が、大正デモクラシイと名のみ事々しい時代の婚前の娘たちにとって慰藉或いは麻醉とよべる程のものであり、苦難に充ちた現実の代替行為又は逃避先となつた（なり得るものだった）かのような取り扱いは、彼女たちに対する愚弄・侮辱として、訂せざるを得ない（なぜなら私の縁辺にもその世代の懐かしい女人がいるから）。

前にも断つたが、本稿は正統的な文学論ではない。文学論であつてしかるべき場でそのことが専ら云々されているところの、この作品の年少読者の実生活への影響乃至価値論の、その錯誤を指摘したものであつて、『花物語』論の△外篇▽と仮題する所以である。

註1 『花物語』掲載の足かけ九年間は女子の進学率はまだ年々大幅に上昇し

ていた模様だが、一つの目安として発想の頭初期、すなわち大正五年度について見ると、この時期の「高等女学校」とよばれるものには家政関係科目を主とする「実科」も含まれ、その中には高等小学校一年修了や同卒を入学資格とする課程もあったが、『花物語』の叙述は実科ではなく、また尋常小学校卒で入学する課程を念頭に置いておられると思われ、その課程への五年度の入学者は桜井役氏『女子教育史』(昭18・2増進堂刊)所載「公立高等女学校入学者調」(表)によれば二〇、四六九。一方、これに対応する尋小卒業者の総数は確かめなかったが、四年度の尋小在学女子総数は文部省編『学制八十年史』(昭29・3刊)所載「教育統計」第三表によれば三、二四三、九六一で、かりにその六分の一(単純平均した一個学年の在学者数)と対比するならば、三・七九%となる。もっとも、『花物語』の終り頃にはおよそこの三倍程にも伸びているから、作者のイメージも読者のそれも当然変化していようが、その場合でも数値自体としては昭和末期の大学・短大進学率の三分の一に過ぎないわけである。

2 女同志の愛情関係への傾倒は実生活の上でも作者の二十代後半以降生涯にわたる門馬千代氏との共同生活(晩年養女として入籍)によって裏付けられる形になっているが、その前提としての(?)男性嫌悪も、生家における男女の地位の差の体験(このこと自体は板垣直子氏『婦人作家評伝』(昭29・6メヂカルフレンド社刊)からも窺えるが)に発するとする吉武輝子氏の説(『女人 吉屋信子』、昭57・12文芸春秋刊)がある。

3 この作品未見。本文は前註の吉武氏著所引に拠る。

なお、右以外の吉屋作品の本文は朝日新聞社版『吉屋信子全集』に拠ったが、『花物語』中『全集』非収録の二篇(「山茶花」「桐の花」)は交蘭社版に拠った。

(平3・3・6稿)